埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

The Relationship of Narcissism and Verbal Responses in Frustration Situations

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-07-26
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 遠田, 諭
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/516

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

フラストレーション場面における自己愛と言語表出の関係

The Relationship of Narcissism and Verbal Responses in Frustration Situations

遠　田　　諭
ONDA, Satoshi

本研究では過敏型自己愛と誇大型自己愛のフラストレーション場面における言語的攻撃を中心とした、実際的な対人場面における言語表出の特徴について検討を行なうことを目的とし、大学生165名を対象に調査を行った。自己愛尺度とP-Fスタディの分析の結果、全体的な傾向として誇大性が高いことが他者非難的な言語表出に結びつきやすいことが示された。また、場面状況によって反応傾向に違いが見られ、特に検査提示場面に対して心理的な距離が大きい場合、誇大型が過敏型よりも表面上は攻撃的な言語表出をしないことが示された。

問題と目的

これまでさまざまな研究者および臨床家によって、自己愛には２つの型があることが指摘され、研究がなされてきた。遠田（2008, 2010）は自己愛を過敏型・誇大型に分けて調査を行い、恥や自己効力感などの質問紙においては過敏型の不適応性と誇大型の適応性が見出され、SCTなどの記述式においてはそれぞれ異なる対人葛藤を生じる可能性が示唆された。Kernberg（1975）や小此木（1981）などによって、自己愛者が対人関係上の問題を呈することが多いことが指摘されているが、これまでに自己愛と対人関係上の自己表現や適応について扱った研究は少ない。対人関係上問題となりやすい表現には怒りがあるが、怒りは攻撃性研究の中で取り上げられ、自己愛と攻撃性の関連については、Kohut（1971）の自己愛的憤怒に関する論文を筆頭に多くの研究がなされてきた。

１．攻撃性に関する理論

攻撃性については、フロイトの精神分析理論における本能論や、ローレンツの比較行動学理論におけるものを中心とした内的衝動説、Dollard, Miller, Doob, Mowrer & Sears（1939）による欲求不満-攻撃仮説を基本として、欲求不満-攻撃仮説に個人の状況認知という視点を取り入れたBerkowitz（1989, 1993）の認知的新連合理論、さらに認知的新連合理論に個人の性格要因を取り入れたAnderson & Anderson（1998）やAnderson, Anderson, Dill & Deuser（1998）による一般的情動攻撃モデルなどが含まれる情動発散説、Bandura（1973）の社会的学習理論を中心とした社会的機能説の大きく分けて３つのパースペク

キーワード：自己愛、P-Fスタディ、フラストレーション場面、言語表出
Key words ：narcissism, P-F study, frustration situations, verbal responses

ティブがある。一方、攻撃性の実証的な研究、特に質問紙による研究においては、これらの理論を背景として攻撃性はその生起過程や機能性から、一般的に能動的攻撃（proactive aggression）と反応的攻撃（reactive aggression）の２つに大別されている（Dodge, 1991;Dodge & Coie, 1987）。能動的攻撃は社会的機能説を背景に持つのに対し（Bandura, 1973;Patterson, 1982;Perry, Perry & Rasmussen, 1986）、反応的攻撃は欲求不満仮説（Dollard et al., 1939）や、その改訂理論である不快情動説（Berkowitz, 1989）を背景に持っている。

２．攻撃性に関連する性格特性

攻撃性には不快情動によって衝動的・反応的に表出する攻撃性と、過去の経験に基づいて戦略的に表出する攻撃性の２つの過程があるが、同じ状況におかれたときに誰しもが同じ攻撃性を表出させるわけではない。ある人は反応的に攻撃し、ある人は戦略的に攻撃し、またある人はどちらの攻撃行動も取らないというように、そこには個人差が存在する。攻撃的な人というとき、実際に攻撃的な行動を取る人という意味と、攻撃的行動を生み出しやすい内的性質を持っている人という２つの意味を含んでいる（大渕，2000）。攻撃的な性格特性を持っているからといって、必ず攻撃的な行動を取るとは限らないため、両者は分けて考える必要がある。Raven & Rubin（1983）が示すように、人間の攻撃行動の生起は、個人的要因、環境要因、社会的・状況的要因の影響を受けるものである。つまり攻撃行動は、その他の対人行動と同様の行動メカニズムを持つものであり、ゆえに原因帰属などの個人の性格特性と認知過程によって行動が制御されると考えられる（Ferguson &Rule, 1983）。また、攻撃的な性格特性とは単一のものではなく、様々な性質があり、その組み合わせによって攻撃的性質の特徴は異なる。

Caprara, Renzi, Alcini, D'Imperio & Travaglia（1983）とCaprara, Cinanni, D'Imperio, Passerini, Renzi & Travaglia（1985）は攻撃性と関連が深い特性として短気（irritability）、易感性（emotional susceptibility）、反芻（rumination）を挙げ、これらの特性は衝動的攻撃の中核要素である不快情動の強度や持続性と関連すると考えられている（大渕，2000）。

社会的機能説に理論的基礎を置く能動的攻撃においては、個人の認知過程が重要となってくるが、この認知過程には様々な個人的偏りがあることが示されている。Gibbs, Potter & Goldstein（1995）は、攻撃反応を促す働きを持つ認知的バイアスとして、「自己中心性バイアス」「責任外在化バイアス」「正当化バイアス」「猜疑心バイアス」をあげた。特に猜疑心バイアスに関連したところで、敵意的知覚と攻撃性との関係を検討した研究がなされている。Ohbuchi（1982）の研究では、被害者は実際に受けた被害の大きさとは無関係に、相手の自分に対する悪意を認知した場合、強い報復攻撃を行った。滝村（1991）は、そのように相手のことを敵意的に認知しやすい傾向をパラノイド傾向としている。特定の状況でなくてもパラノイド傾向を持続的に持ち続ける人々が存在し、このような傾向が攻撃や暴力など反社会的行動に結びつきやすいという研究もある（Dodge, 1980;Ohbuchi, 1982）。

また、最近の攻撃性に関連する性格特性の研究では、自尊心に注目が集まっている。自

尊心とは自己評価に基づき自分自身を大切にする感情のことである。社会的機能説では、攻撃的反応の機能性の一つとして社会的同一性あるいは印象操作を挙げている。人前で自身の面子を潰されるような事態となった際に、つまり自尊心を低下させられるような事態に直面した際に、それを回復させるために攻撃的行動を取ると考えられる。しかし、人は誰しも自尊心を持って生きていると言えるため、自尊心が全て攻撃に結びつくわけではない。Bushman & Baumeister（1998）の研究では、現実に即していない高い自己評価を持っている者ほど、他者からの否定的な評価が自尊心へ与える脅威が強く、自尊心を守るため相手に対して攻撃的になったことを示した。この研究では、自己評価が高いから攻撃的になるのではなく、現実的根拠が弱く、高いがもろい自己評価を持つ人、つまりは自己愛の高い人が批判に対して過敏で、それゆえ、攻撃的に反応しやすいことを示している。

3．自己愛と攻撃性の関連性

このように、状況に対して敵意的に知覚しやすく、不快な情動を感じやすいなどといった特性を持っていることで、能動的攻撃あるいは反応的攻撃を取りやすくなるといったことが示されている。特に、非現実的な高い自己評価を持っている者に関しては、他者からの批判に対して敏感に反応するという点から他者を敵意的に見やすく、もろい自己評価ゆえに不快な情動を感じやすいと言える。そのような性質を持った個人は心理臨床の領域を中心に自己愛者と呼ばれている。

大渕（2003）は凶悪犯罪と自己愛の関連を指摘しているが、社会的に深刻な犯罪に結びつくものだけでなく、日常的な攻撃的傾向と自己愛が関連していることが多く指摘されている（福島，1992；田中，1996）。また、中川（2004）は、臨床事例における印象として、「『自己愛』を傷つけられた若者の中には、悪いのは自分を傷つけた他者であるとし、彼らへの攻撃を正当化しているものも少なくない」としている。

このように、攻撃性の研究においても、社会的な問題や臨床事例においても自己愛と攻撃性の関連が指摘されている。

4．青年期における自己愛と攻撃性の問題

Blos（1967）を筆頭に、青年期と自己愛の関連が深いことが数多くの研究で指摘されてきた。また、Kohut（1984）をはじめ、小此木（1987）など多くの臨床家が青年期に自己愛の障害が顕著であることを指摘している。青年期は、自己が現実には不完全で限界を持つことを徐々に認識し、幼児的で誇大な空想や顕示性を減少させ、自己愛をより安定した、現実に根付いた自己価値に変容させる仕事が必要になる時期と位置づけられる（Kohut, 1984）。これに失敗すると、対人関係上問題のある自己愛性が表出すると考えられる。特に、Kohut（1971）が“自己愛的憤怒”と表現したように、自己愛が満たされないことによる爆発的な攻撃性が臨床事例などによって提示されてきた。また、Gabbard（1989）は、誇大型の特徴として「傲慢で攻撃的」という特徴を挙げている。他にも、小塩（2002）や中川（2002）などの研究によって、誇大型が言語的攻撃に影響していることが指摘されている。しかし、それらの研究は質問紙調査による特性的な攻撃性の検討がほとんどであり、実際的な場面での攻撃性を想定したものは阿部・高木（2006）などごくわずかである。自

己愛者は表面的な適応は良いこともあるが、共感性に乏しく自己顕示的で自己中心的な振る舞いが目立つため、対人関係上の問題を示すことが多いことも指摘されている（Kernberg, 1975；小此木, 1981）。臨床的支援を視野に入れると、実際の対人場面においてどのような言語的攻撃を行っているかを詳細に把握することが重要となってくるだろう。また、過敏型においては、誇大傾向とともに過敏傾向も持ち合わせているため、直接的な言語的攻撃は表面上取ることは少ないと考えられるが、別の形での表現を取る可能性が考えられる。そこで、本研究では過敏型と誇大型のフラストレーション場面における言語的攻撃性を中心とした、実際的な対人場面における言語表出の特徴について検討を行なうことを目的とする。

方法

1．対象者と手続き

2008年４月から2011年１月に関東にある私立大学２校の学生165名を対象に、授業時間内に質問紙およびP-Fスタディを配布して調査を行い、そのうち回答に不備があるものを除いた157名（男性：87名、女性70名）を分析対象とした。分析対象者の平均年齢は20.1歳（SD=1.15）であった。P-Fスタディのスコアリングは筆者と臨床心理士１名によって個別に行い、不一致のものは討議により決定あるいは特定不能とした。

2．使用尺度・検査

(1) 自己愛尺度　高橋（1998）のものを使用した。これは、“周囲のことを気にする傷つきやすいナルシシズムの因子”14項目と“周囲を気にかけない誇大的なナルシシズムの因子”11項目で構成されており、それぞれの記述について自分がどの程度当てはまるかについて“全く当てはまらない”から“非常に当てはまる”までの5件法にて回答を求めた。

(2) P-Fスタディ（絵画欲求不満テスト）成人用24項目

結果

1．対象者の群分け

自己愛尺度の各下位尺度である過敏傾向と誇大傾向の平均値をもとに、高群・低群の組み合わせにより自己愛低群（過敏傾向低・誇大傾向低群）、評価懸念群（過敏傾向高・誇大傾向低群）、誇大型群（過敏傾向低・誇大傾向高群）、過敏型群（過敏傾向高・誇大傾向高群）の4群に分けた。各群に分類された人数は、過敏型群43名、誇大型群31名、評価懸念群43名、自己愛低群40名であった。全体および各群の過敏傾向・誇大傾向の平均値および標準偏差を表１.に示す。

P-Fスタディの分析に際しては、24のフラストレーション場面を因子分析によって分類した秦（1982）に基づき、場面を５つに分類して分析を行った。５つの分類とは、分類１.予期しない自己の過失によるフラストレーション（場面：２、17、21、22)、分類２.理由づけ可能な他者の過失によるフラストレーション（場面：１、4、15、20、24)、分類３.相手からの直接的攻撃によるフラストレーション（場面:７、10、11、13、16)、分類４.社会的規範によるフラストレーション(場面:５、６、16、19)、分類５.第三者の妨害によるフラストレーション（場面：３、12、14、18、20）である。

表１．各各群の過敏傾向・誇大傾向の平均値および標準偏差

		過敏傾向	誇大傾向
全体(n=157)	平均	37.3	22.9
	SD	10.03	7.41
過敏型群(n=43)	平均	45.8	29.6
	SD	4.97	4.44
誇大型群(n=31)	平均	29.5	29.2
	SD	5.38	5.27
評価懸念群(n=43)	平均	44.1	17.4
	SD	4.50	3.27
自己愛低群(n=40)	平均	26.9	16.9
	SD	6.48	3.73

２．分散分析

４群間のP-Fスタディにおける反応傾向に関する比較を行うために、５分類ごとに各反応の出現率について分散分析を行った結果、分類１ではE'(F=(3,153)=2.70, p<.05)、分類２ではM(F(3,153)=5.14, p<.01)、分類３ではE'(F(3,153)=2.51, p<.10)、分類５ではe(F(3,153)=5.542, p<.01)、M(F(3,153)= 2.20, p<.10)において群の効果が有意あるいは有意傾向であったため、TukeyのHSD法による多重比較を行った（表２.）。その結果、分類１.のE'（他責逡巡）では、自己愛低群が誇大型群に対して高かった(p<.10)。分類２.のM(無罰）では、誇大型群が過敏型群・評価懸念群に対して高かった（p<.10)。分類３.のE'（他責逡巡）では、過敏型群が自己愛低群に対して高かった（p<.10)。分類５.のe（他責固執）では、過敏型群が他３群すべてに対して高かった（p<.05)。また、M(無罰)では、誇大型群が過敏型群に対して高かった（p<.05)。

また、GCR値・E・I・E+I・E・I・〔O-D〕・〔E-D〕・〔N-P〕・〔E-A〕・〔I-A〕・〔M-A〕・〔(M-A)+I〕についても同様に分散分析を行ったところ、〔M-A〕（F（3,153）=2.33, p<.10）において群の効果が有意傾向であったため、TukeyのHSD法による多重比較を行った(表２.)。その結果、評価懸念群が過敏型群に対して高かった（p<.10)。

表２．各分類ごとの反応出現率に関する分散分析および多重比較（Tukey, HSD）結果

		過敏型群	誇大型群	評価懸念群	自己愛低群	F値（上段） 多重比較結果（下段）
分類１．予期しない自己の過失によるフラストレーション						
E'（他責逡巡）	平均	.039	.008	.019	.059	F（3,153）=2.70*
	SD	.899	.449	.067	.112	自己愛低＞誇大型
分類2.理由づけ可能な他者の過失によるフラストレーション						
M（無罰）	平均	.551	.668	.474	.574	F（3,153）=5.14**
	SD	.219	.196	.199	.223	誇大型＞過敏型、評価懸念
分類3.相手からの直接的攻撃によるフラストレーション						
E'（他責逡巡）	平均	.020	.004	.003	.000	F（3,153）=2.51+
	SD	.066	.022	.019	.000	過敏型＞自己愛低
分類5.第三者の妨害によるフラストレーション						
e（他責固執）	平均	.129	.041	.058	.065	F（3,153）=5.54**
	SD	.129	.072	.085	.110	過敏型＞誇大型、評価懸念、自己愛低
M（無罰）	平均	.180	.284	.224	.249	F（3,153）=2.20+
	SD	.180	.170	.174	.190	誇大型＞過敏型
〔M-A〕	平均	.288	.327	.340	.330	F（3,153）=2.33+
	SD	.072	.106	.109	.102	評価懸念＞過敏型

(**p<.01 *p<.05 +p<.10)

3．相関

5分類ごとに、自己愛尺度と各反応の出現率について相関係数を算出した。そのうち有意もしくは有意傾向であったもののみ表3.に示す。分類1.予期しない自己の過失によるフラストレーション場面では、誇大傾向がe(他責固執）と正の相関（p<.10)、i(自責固執）と負の相関（p<.10）があった。分類2.理由づけ可能な他者の過失によるフラストレーション場面では、過敏傾向がE'(他責逡巡)と正の相関(p<.10)、M(無罰)と負の相関(p<.01)があり、誇大傾向がM'(無責逡巡)と負の相関(p<.05)、M(無罰)と正の相関(p<.05)、m(無責固執)と負の相関（p<.10)があった。分類3.相手からの直接的攻撃によるフラストレーション場面では、誇大傾向がE'(他責逡巡)と正の相関（p<.10)、M（無罰)と負の相関(p<.05)があった。分類4.社会的規範によるフラストレーション場面では、過敏傾向がE(他罰変形)と負の相関（p<.10)、m(無責固執)と正の相関(p<.10)があり、誇大傾向とi(自責固執)が負の相関(p<.10)があった。分類5.第三者の妨害によるフラストレーション場面では、過敏傾向がe(他責固執)と正の相関（p<.10）があり、誇大傾向がM'(無責逡巡）と負の相関（p<.10）があった。

また、GCR値・E・I・E+I・E・I・〔O-D〕・〔E-D〕・〔N-P〕・〔E-A〕・〔I-A〕・〔M-A〕・〔(M-A)+I〕についても同様に自己愛尺度との相関係数を算出したところ、誇大傾向は〔E-A/他責的〕と正の相関(p<.05)、〔M-A/無責的〕・〔(M-A)+I〕と負の相関(p<.01)があった。

表3．各分類ごとの自己愛尺度と反応の相関

	過敏傾向	誇大傾向
分類1．予期しない自己の過失によるフラストレーション		
e（他責固執）		.146+
i（自責固執）		-.153+
分類2．理由づけ可能な他者の過失によるフラストレーション		
E'(他責逡巡)	.146+	
M'(無責逡巡)		-.185*
M（無罰）	-.249**	.167*
m（無責固執）		-.147+
分類3．相手からの直接的攻撃によるフラストレーション		
E'(他責逡巡)		.138+
M（無罰）		-.164*
分類4．社会的規範によるフラストレーション場面		
E（他罰変形）	-.151+	
i（自責固執）		-.141+
m（無責固執）	.152+	
分類5．第三者の妨害によるフラストレーション		
e（他責固執）	.148+	
M'(無責逡巡)		-.135+
そのほかの指標		
E-A（他責）		.196*
M-A（無責）		-.230**
M-A+I		-.237**

(**p<.01 *p<.05 +p<.10)

考察

1．分類1.予期しない自己の過失によるフラストレーション場面について

自己愛低群が誇大型群に対してE'（他責逡巡）の出現率が高く、誇大傾向がe（他責固執）と正の相関（p<.10）、i（自責固執）と負の相関（p<.10）があった。分類1には場面2・17・21・22が含まれているが、E'が出現するのは場面17・22のみである。分類1は自分自身に何らかの責任が存在する可能性の高い場面であるが、場面22は責任の所在がやや不明確で相手に責任がある状況と認知する可能性もある場面である。自己愛低群の具体的な反応としては、場面17「マジかよ」「やっちまった」、場面22「いてて」「はい、大丈夫です。少し痛いけど･･･」「はい。腰を少し打っただけです」「骨が・・・折れた・・・」などがある。これらは、その状況において感じたことをそのまま言語化した反応と言える。自己愛低群においては、他者からの評価を気にする傾向である過敏傾向が低いために、自分の言動が他者にどのように影響を及ぼすかについてむしろ無頓着であり、このような率直な反応が出やすかった可能性が考えられる。

分類1.における場面は自己の過失によるものではあるが、能力不足などが露呈して自己愛の傷つきを感じたり、大きく自尊心を損なうような事態ではない。そのために、誇大型群はE'のような不満を率直に示す反応をしなかったのではないだろうか。しかし、弱い相関ではあるが、誇大傾向はe(他責固執)と正の相関、i(自責固執）反応と負の相関があることを考えると、誇大傾向が高いと直接的な不満の表明や攻撃的な反応をしない代わりに、自分に責任があるような状況においても自分がその責任を取るための行動をするのではなく、解決のための援助を他者に期待する可能性が考えられる。

2．分類2.理由付け可能な他者からの過失によるフラストレーション場面について

誇大型群が過敏型群・評価懸念群に対してM（無罰）の出現率が高く、過敏傾向がE'（他責逡巡）と正の相関（p<.10)、M（無罰）と負の相関（p<.01）があり、誇大傾向がM（無罰）と正の相関（p<.05)、M'（無責逡巡）と負の相関（p<.05)、m（無責固執）と負の相関（p<.10）があった。分類2には場面1・4・15・20・24が含まれており、これらは他者に過失の責任があり、他者がそれについて謝罪を述べている場面である。誇大型群のM反応の具体例としては、場面1「いえいえ。仕方ありませんよ。お気になさらずに」「いいですよ。でも次から気をつけてくださいね」、場面4「しょーがない。次の電車に乗るよ。君のせいじゃないのだから」「故障じゃ仕方ない」、場面15「そんなことありませんよ。失敗は成功のもとともいうし」「そんなことありませんよ。勝負は時の運ですからね」、場面20「まぁ、そんな日もあるわよ」「そう？気にすることないわ」、場面24「赤ちゃんじゃしょうがないな。今度からきをつけてくれよ」「あぁ、古新聞に出すつもりだったから大丈夫」などがある。M（無罰）反応は、欲求不満に対する非難を避けて、やむを得ない状況であったとか、たいしたことではないと欲求不満の原因となった人を許容する反応である。このように、誇大型はあまりこだわらず、たいしたことではないとしてその場を流す傾向がある。明確な傾向ではないが、過敏傾向とE'およびMの相関を考えると、過敏型群は

その場を流せずに不満の言葉が先にたちやすいように見える。過敏傾向の高い過敏型群・評価懸念群のE’反応の具体例を見ると、場面１「いえ、いいですけど・・・。この服高かったんですよねー」「これじゃあ、友達に笑われてしまいますよ」、場面４「困ったなー。汽車以外に交通手段ありますかねー」、場面20「そうね、ひどいわよね。何か理由があるのかしら」「そうね。ちょっとショックだったわね」（同様のものが複数）、場面24「げーっ！」「な、なんてことだ！・・・」などがあるが、両群の分類２.におけるE’反応の69.5%が場面20において出現している。場面20はその場にいない第三者の意図が不明確な状況において、目の前の他者の発言に対して反応しなくてはならない。場面20におけるE’反応は不満の表明というよりもむしろ、その場の他者への共感的反応とも考えられ、あくまでもその場にいる他者と対立せずにうまく同調した結果とも考えられる。過敏傾向の高さゆえに、その場にいる他者からの評価を優先させたのではないだろうか。このようなE’反応を行なうため、過敏型群・評価懸念群においては相対的にM反応が少なくなると考えられる。

分類２.の場面は、多少の物理的被害を被っている場面ではあるが、検査の特性上あくまでも想定の場面であり実際の状況で受ける心理的被害よりは距離があると言え、その分不快な情動が生じる程度が小さく冷静に対応することが可能であろう。そのため、誇大型群は攻撃的にならずに受け流しやすかったことが考えられる。

３．分類３.相手からの直接的攻撃によるフラストレーションについて

過敏型群が自己愛低群に対してE’（他責逡巡）の出現率が高く（p<.10）、誇大傾向がE’（他責逡巡）と正の相関（p<.10）、M（無罰）と負の相関（p<.05）があった。分類３には場面7・10・11・16が含まれ、原因が自己にあるかやや不明確な状態で相手から非難を受けているような場面であるが、スコアリング上E’が出現しうるのは場面11のみである。場面11は時代にそぐわないものではあるが、自己には何ら非がない状況で、相手側が注意すれば回避できる可能性がある被害状況である。過敏型群の場面11におけるE’反応の具体的な内容は「はぁ・・・」「そうですか。でも違う番号なので・・・」「あらら」「しょうがないな。これからは気をつけるようにね」などであり、攻撃的な表現とまではいかないものの、不満を表明している。場面11の相手は見ず知らずの顔の見えないその場限りの関係であり、さらに電話を切ることで関係性を一方的に切ることができる状況であるため、不満の表明しやすさにつながってるのではないだろうか。

相関関係から考えると、過敏型のE’の出現率が高くなったのは、誇大傾向によるものと考えられ、誇大傾向が高いとこのような第三者からの直接的攻撃に対しては、相手を許容してその状況を受け流すのではなく、攻撃的な不満の表明の仕方をしやすいと言える。過敏型のみ出現率が高くなり誇大型は他群との差がなかったのは、何らかの相互作用があったものと推測されるが、統計的には不明確であり過敏型の複雑さを示唆するものであるとも言える。

4．分類4．社会的規範によるフラストレーション場面について

4群間に明確な差異はなかったが、過敏傾向がE(他罰変形）と負の相関（p<.10)、m(無責固執）と正の相関（p<.10）があり、誇大傾向とi(自責固執)が負の相関(p<.10)があった。過敏傾向の高い過敏型群・評価懸念群の分類4．においてm反応が出現しているのは場面6のみである。具体例としては、場面6「そうですか。それではこの2冊お借りします」(同様のもの15件)「分かりました。ではこの2冊を返しておいてください」「では選びなおします」(同様のもの4件）などである。これらは、その状況における規則をそのまま受け入れ、それに則る反応である。一方、誇大傾向と負の相関があるi(自責固執）は規則を知らなかった事を自らの責任として、罪責感を解消する為に自ら行動を起こすものである。このことから誇大傾向が高いと自ら積極的には行動しない傾向を示していると言える。過敏傾向・誇大傾向ともに高い過敏型群においては、その規則に則った行動を取るものの罪責感は感じることなく、暗に相手に期待する反応をしやすい傾向が考えられる。この場面は、お互いの役割がはっきりしており、役割以上の関係性がない場面である。このようなお互いが明確な役割を負っている場合には、相手の役割に期待した反応が出やすいのであろう。

5．分類5．第三者の妨害によるフラストレーション場面について

過敏型群が他3群すべてに対してe(他責固執）の出現率が高く（p<.05)、誇大型群が過敏型群に対してM（無罰）の出現率が高く(p<.05)、過敏傾向がe（他責固執）と正の相関（p<.10）があり、誇大傾向がM'（無責逡巡）と負の相関（p<.10）があった。分類5には、場面3・12・14・18・20が含まれ、現時点では直接的な接触のない他者の行為によって欲求不満が引き起こされる場面である。過敏型群のe反応の具体例としては、場面3「前の人に帽子を取ってもらうようお願いしてみようか」(同様のもの5件)「困ったな。すみません。見えないので帽子を外していただけませんか」(同様のもの6件)、場面12「なんだと。どうにかしてくれよ」「その男が間違いに気付いてここに戻ってきたら私に知らせてください」「どうにか連絡取れませんか」(同様のもの5件)、場面14「ちょっと電話してみてくれる」、場面18「あっ・・・そうですか･･･。本当にもう残ってないのですか」「取り寄せとか注文とか予約とかできませんか。どうしても欲しいんです」、場面20「そうねぇ。何か手違いがあったのかもしれませんねぇ。後で聞いてみましょう」などである。これらのe反応は、欲求不満を解消するための行動を他者に強く期待するものである。一方、誇大型群のM反応の具体例としては、場面12「疲れてたんだね」、場面14「どうしたのだろう。何かあったのかな」(同様のもの7件)「どうしたのかしら。事故でなければ良いのだけれど・・・」(同様のもの3件)、場面18「そうですか。わかりました」(同様のもの5件)、場面20「人それぞれだからあまり深く考えない方が良いかと」(同様のもの5件)「向こうにも事情はあるから」(同様のもの5件）などである。M（無罰）反応は、やむを得なかったこととして他者を許容する反応である。これらから、第三者によって引き起こされた欲求不満状況において、誇大型群はその状況を受け入れて他者を非難せずに

許容し、過敏型群は他者に対して積極的な問題解決を期待する傾向があるといえよう。積極的な問題解決自体は不適応なものではなく、むしろ適切なものであることも多い。しかし、相手がそれに応じず思い描いた解決に至らない場合には、さらなるフラストレーションを招きより攻撃的な方法を取る可能性も秘めているものである。また、誇大型群のように相手を許容し受け流す姿勢についても、表面的には対立を生じさせないが、解消されないフラストレーションが残る可能性もある。遠田（2010）においてSCTへの記述内容の傾向から、誇大型は自分に被害を与えた他者に対する執着心が強いことが指摘されており、表面上は何事もないように振舞っていても、根深く不満を抱えている可能性がある。その場合には、受動攻撃的な行動などより複雑な形での表出がなされることになろう。

6．そのほかの指標について

評価懸念群が過敏型群に対して〔M-A〕の出現率が高く（p<.10）、誇大傾向は〔E-A/他責的〕と正の相関（p<.05）、〔M-A/無責的〕・〔(M-A)+I〕と負の相関（p<.01）があった。〔M-A〕はフラストレーション状況において、他者を弁護する反応であり、一方Iは自己を弁護する反応である。これらは社会性・精神発達と関係があるとされており（林，2007）、誇大傾向と社会適応の関係を示すものと言える。全体としては、誇大傾向の高さが他者の弁護ではなく、他者の非難につながりやすいと言える。

総合考察・今後の課題

全体的な傾向としては、誇大傾向の高さが他者の非難につながりやすく、社会性の低さと結びつく可能性が示された。しかし、場面状況によって反応傾向の違いも見受けられた。分類３.のような他者からの直接的攻撃に対しては、誇大性が反応して攻撃的な傾向に結びつくものの、分類２.や分類５.などでは実際の場面よりも心理的な距離が大きく、誇大型群が過敏型群に対してM反応の出現率が有意に高い結果となり、表面上は必ずしも攻撃的な言語表現を取らないことが示された。

Kohut（1971）による自己愛的憤怒のような自己愛が傷つけられたことによる反応的な攻撃性は、誇大的な自己を否定されたときに生じるものである。また、丸田（1992）は、誇大性・賞賛されたい欲求・共感の欠如を自己愛の病理の特徴として強調し、その成就を阻むものに対しての怒りや拒絶的な感情の存在を指摘している。今回のP-Fスタディにおいては、そのような誇大的な側面が刺激され自己評価が揺らぐような場面が少ないために、誇大型群の攻撃性が表現されにくかったのかもしれない。また、P-Fスタディでは思いついた反応を記述することが求められるものの、ある程度意識的なコントロールがかかっているとみなすべきである。P-Fスタディでは感情面が揺さぶられにくく、さらには瞬間的な反応ではなく考える時間ができてしまう。そのために社会的望ましさが影響し、反応的攻撃としての言語表出が抑えられている可能性も考えられる。実際の場面においては、反応はもっと瞬間的なものであり、意識する間もなく出てくるものも多いであろう。自己愛と社会的望ましさの関連を調べた先行研究においては結果が一致していない（小塩，1997など）が、授業時間内における集団実施という状況は社会的望ましさを高めた可能性がある。この点については、調査方法の今後の課題で

ある。また、過敏型群に関しては他者との関係性によって反応傾向に違いがあるようであるが、反応の背景にあるものまでは明確にすることができていない。スコアリング上は他者非難として分類されるものであっても、状況に応じた意図を含んでいる可能性がある。秦（2007）は､「同じ場面でも被検査者の認知によって反応が左右される」としている。今回の研究では、分析対象となるのは記入された反応のみであり語義的水準でのスコアリングを行ったため、どのような状況認知によってその反応が生まれたかについては検討できていない。また、語義的なものだけでなく、実際のコミュニケーションにおいては非言語的な側面によっても大きく印象が異なってくるだろう。さらには実際のコミュニケーションは、相手との現在の関係性や将来的な関係性の予測などが重要な要因として含まれ、非常に複雑な相互性の中で行われる。

今後、その状況をどのように認知し、どのような非言語的表現を含んだ表現であり、そしてどのような目的・意図でその言動を取ったかについて詳細に検討を行う必要があるだろう。特に、誇大型群が社会の中で非機能的なコミュニケーションを行いがちな場面の特定や、その場面での反応内容の検討、およびその背景にある認知的特徴との関連を包括的に捉える研究が必要である。

引用文献・参考文献

阿部晋吾・高木修　2006　自己愛傾向が怒り表出の正当性評価に及ぼす影響　心理学研究，77（2），170-176.

Anderson, C.A. & Anderson, K.B. (1998) Temprature and aggression : Paradox, controversy, and a (fairly) clear pisture. In R.G.Geen&E. Donnerstein (Eds.), *Human aggression: Theories, research, and implications for social policy*. San Diego, CA:Academic Press. pp.248-298.

Anderson, K.B.,Anderson, C.A., Dill,K.E., & Dueser, W.E. (1998) The interactive relations between trait hostility, pain, and aggressive thoughts. *Aggressive Behavior*, 24, 161-171.

Bandura, A. (1973) *Aggression: A social learning analysis*. Engelwood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.

Berkowitz, L. (1989) The frustration-aggression hypothesis: An examination and reformulation. *Psychological Bulletin*, 106,59-73.

Berkowitz, L. (1993) *Aggression:Its causes, consequences, and control*. New York: McGraw-Hill.

Blos, P. (1967) The second individuation process of adolescence. *The psychoanalytic Study of the child*, 22, 162-186.

Bushman, B.J. & Baumeister, R.F. (1998) Thereatened egotism, narcissism, self-esteem, and direct and displaced aggression: Does self-love or self-hate lead to violence? *Journal of Personality and Social Psychology*, 75, 219-229.

Caprara, G.V., Cinanni, V.D'Imperio, G.Passerini, S., Renzi, P. & Travaglia, G. (1985) Indicators of impulsive aggression: Present status of research on irritability and emotional susceptibility scales. *Personality and Individual Differences*, 6, 665-674

Caprara, G.V., Renzi, P., Alcini, G., D'Imperio, G, Travaglia, G. (1983) Instigation to aggress and escalation of aggression examined from a personlogical perspective:The role of irritability and of emotional susceptibility. *Aggressive Behavior*, 9, 345-351.

Dodge, K.A. (1980) Social Cognition and Children's Aggressive Behavior. *Child Development*, 51, 162-170.

Dodge, K.A., & Coie, J.D. (1987) Social-information-

processing factors in reactive and proactive aggression in children's peer groups. *Journal of Personality and Social Psychology*, 66, 710-722.

Dollard, J., Doob, L., Miller, N.E., Mowrer, O.H., & Sears, R.R. (1939) *Frustration and aggression. New Haven* : Yale University Press. 宇津木保（訳）1959　欲求不満と暴力　誠信書房

Ferguson, T.J. & Rule, B.G. (1983) An attributional perspective on anger and aggression. In R.G.Geen & E.Donnerstein (Eds.), *Aggression: Theoretical and empirical revies*: Vol.1. Theoretical and methodological issues. New York: Academic Press. Pp.41-74.

福島章（1992）青年期の心　講談社現代新書

Gabbard, G.O. (1989) Two subtypes of narcissistic personality disorder. *Bull Menninger Clin*, 53, 527-532.

Gibbs, J.C., Potter, G., & Goldstein, A.P. (1995) *The EQUIP program:Teaching responsible thinking and acting through a peer-helping approach*. Champaign, IL:Research Press.

秦一士（1982）P-F Study（成人版）場面の因子分析　人間科学年報（甲南女子大学），7 , 27-34.

秦一士（2007）新訂P-Fスタディの理論と実際　北大路書房

林勝造（2007）P-F スタディ解説　三京房

Kernberg, O.F. (1975) *Borderline conditions and pathological narcissism*. London: Jason Aronson

Kohut, H. (1971) *The Analysis of the Self*. New York, International Universities Press. 水野信義・笠原嘉監訳　1994　自己の分析　みすず書房

Kohut, H. (1984) *How Does Analysis Cure?* The University of Chicago Press. 本城秀次・笠原嘉監訳　1995　自己の修復　みすず書房

丸田俊彦（1992）コフート理論とその周辺　－自己心理学をめぐって－　岩崎学術出版社

中川美保子（2002）青年期の攻撃性の促進や抑制に影響を及ぼす要因 －自己愛や自尊感情との関係を中心に－ 日本教育心理学会総会発表論文集，44，633.

中川美保子（2004）過剰な攻撃性を表出する青年への援助について　京都大学大学院教育学研究科紀要，50，413-425.

Ohbuchi, K (1982) Negativity Bias:It's Effects in Attribution. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 8, 49-53.

大渕憲一（2000）攻撃と暴力 －なぜ人を傷つけるのか－ 丸善ライブラリー

大渕憲一（2003）満たされない自己愛 －現代人の心理と葛藤－ 筑摩書房

小此木啓吾（1981）自己愛人間　朝日出版社

小此木啓吾（1987）「一・五の時代」ちくまライブラリー４

遠田諭（2008）青年期における2つの型の自己愛の恥および理想自己・義務自己との一致度について　立教大学臨床心理学研究，２，13.20.

遠田諭（2010）２つの型の自己愛の認知および価値観に関する探索的研究　埼玉学園大学紀要人間学部篇，10，113-124.

小塩真司（1997）自己愛傾向に関する基礎的研究－自尊感情、社会的望ましさとの関連－　名古屋大学教育学部紀要心理学，44，155-163.

小塩真司（2002）自己愛傾向によって青年を分類する試み－対人関係と適応、友人によるイメージ評定からみた特徴－　教育心理学研究, 50, 261-270.

Patterson, G.R. (1982) *Coercive family process*. Eubene, OR: Castalia.

Perry, D.G., Perry, L.C., & Rasmussen,P. (1986) Cognitive learning mediators of aggression. *Child Development*. 57, 700-711.

Raven, B.H. & Rubin, J.Z. (1983) *Social Psychology* (2nd ed.). John Wiley & Sons.

高橋智子（1998）青年のナルシシズムに関する研究－ナルシシズムの２つの側面を測定する尺度の作成－　日本教育心理学会第40回総会発表論文集，147.

滝村美保子（1991）パラノイド傾向と攻撃行動-パラノイド質問紙作成の試み及びパラノイド傾向と飛行との関連性の検討-　応用社会学研究，１，61-791.

田中信市（1996）家庭内暴力－嵐をのりこえるために－　サイエンス社